



薩摩藩英国留学生記念館
開館 10 周年記念

「旅立ちの地」エッセイコンテスト

準大賞

羽島郵便局長賞

元薩摩藩士の帰郷

原田 照子 北海道

札幌市近郊の琴似駅ホームに立つ私の視界に、新千歳空港行き列車がようやく姿を現した。吹雪の中を懸命に走って来た列車が目の前で停車したとき、早朝の仄暗い駅舎の空気が一変し、私は安堵の息をついた。

新千歳空港で我々一行が乗る羽田便は、大雪のため一時間遅れで飛び立ち、羽田では鹿児島便が待機していた。札幌と東京とで二十四名になるツアー名は「村橋久成を里帰りさせる会」だった。

村橋久成は、札幌の田中和夫氏の小説「残響」により、百年ぶりにこの世に甦ってから十数年経っていた。北海道開拓使で産業開拓に功績を遺した人物は、その生涯もまた波乱に満ちていたという。私は、このツアー前に開催された田中和夫氏「残響」復刻出版と西村英樹氏「夢のサムライ」出版パーティーで、その存在を知ったツアー参加者だった。

羽田離陸後、神戸迂りを想定した私は、「さあ

村橋さん、これから一緒に鹿児島へ帰郷しましょう」と、呟いてみた。

明治十四年、北海道開拓使十カ年計画の終了に伴い官有物払下げ事件が吹き荒れた頃、村橋久成は開拓使を辞職した。放浪行脚十一年目、村橋久成の足は故郷へ向かっていった。だが、心臓弁膜症を抱えた身は、神戸で力尽きる…。村橋久成の帰郷は、途絶したままだったのだ。

鹿児島空港に着いたのは午後一時過ぎ。緑も鮮やかな松並木が天を突き、垣根に咲くツツジの赤い花が私の目を射った。

ホテルの十一階の部屋に入ると、私は窓に駆け寄ってカーテンを引いた。桜島が雄大な姿を現して、私は歓声を上げた。

「村橋久成年譜」によると、桜島を後にしたのは、北海道開拓使東京出張所へ出立する明治四年十一月二十九日で、二十九歳だった。神戸での帰郷途絶は明治二十五年九月二十八日で、享年五十三歳だった。

私は桜島を眺めながら呟く。

「ついに帰郷を果たしましたね」

村橋久成が帰郷を果たしたこの日は、平成十一年（一九九九）一月二十九日だった。

そして、南日本新聞社主催の文化セミナー「村橋久成の不思議と発見」が、鹿児島サンロイヤルホテル太陽の間で開かれた。参加者は四百名だという。

四人のパネリストが、話を展開する。

「自ら留学を希望したわけではないが、薩摩藩の重役を務める者として使命感や責任感があった」

「村橋らが英語で学ぶとき、言葉の壁があったと思う。当時の若者の能力の高さを感じる」に、村橋久成が幕末の薩摩藩英国留学生だったことを、このときに私は印象付けられたのだった。

セミナーから十五年後の平成二十六年の夏、留学生渡欧の地、いちき串木野市の羽島浦を訪ねた。セミナーを機に発足した「北海道久成会」仲間と共に、「薩摩藩英国留学生記念館」の落成式に参加したのだった。村橋久成曾孫の大山登規子さんは、二度目の羽島浦だったらしく、前に来たとき大きな岩があったはずだと呟きながら、「曾祖父はこんな綺麗な海から旅立ったのねえ」と言った。

「北を開拓しながら国を守る屯田兵」のことも語られた。村橋久成が北海道最初の屯田兵村の測量、区画割り、道路割りを、熊が跋扈する密林荒野時代に手掛けた地は、私の生活エリアの札幌市琴似だったことを、後で知った。

セミナーの後、交流の夕べが開かれた。

乾杯の飲物は、明治九年九月二十三日に村橋久成が奔走して開業を迎えた、官営麦酒醸造所を起源とするサツポロビールだった。

パネリストの一人、「残響」著者田中和夫氏は、昨年令和五年二月に享年九十一歳で亡くなった。セミナーの日は、「村橋が取り持つ南北交流のスタートだ」と言っていたのを思い出す。

白一色の吹雪とツツジの赤い花の南北対比は、二十五年経った今でも鮮烈である。